

柳田國男は「山宮考」(1947年6月)で、「私は折口氏などちがって、盆に来る精霊も正月の神も、共に家々の祖神だろうと思つているのである」と述べている。これは折口が「国文学の発生」(第三稿)中の次の言に対する意見と見てよいだろう。

「沖縄の民間伝承からみると、まれに農村をおとずれ、その生活を祝福する者は、祖霊であった。そうしてある過程には妖怪であった。さらに次の経路をみれば、海のあなたの楽土の神となっている。我が国においても、東西を見わたしてかんがえてみると、かすかながら、祖霊であり、妖怪であり、そうして多くの神となつてしまつてゐる事がみられる」。

柳田は「盆に来る精霊」と「正月の神」に限定しているが、折口は、この時点で、来方神への信仰が過程的に変容しており、また「妖怪」を交えている。折口は、来訪神一般を考え、原始的なシャーマニズムの邪神の混入を想定しているからである。そのときから両者の前提としている事態、根本的な発想が食い違ったまま、終生、変わらなかったと判断される。

これまでに、この問題を扱って最もくわしい書物は、諏訪春雄『折口信夫を読み直す』(講談社現代新書、1994)であろう。諏訪春雄も中国を含めて民間の祭祀儀礼の側から考えているが、悪魔払い、邪鬼祓いの儀礼が付随するものがないのだろうか。チベット仏教ではまず悪魔祓いの呪文を唱えることは1920年代には広く伝わっていた。孔雀経など密教も早くから伝わり、修験道にも邪神を払う儀礼はある。そして、日本の神話にもシャーマニズムの邪神の影は色濃く、村落や家に禍をもたらす説話も少なくない。『神道大辞典』第1巻(平凡社、1937)、福田アジオ・他編『精選 日本民俗辞典』(吉川弘文館、2006)などの「悪魔」の項を参照。

「民俗学」と「国文学」を分断し、柳田國男の民俗学を客観主義・実証主義とし、折口信夫の「実感」主義を主観主義のように考えている限り、最初から答えを決めているのと同じである